

漢川行 (其の二)



西陵峡

宜昌到着

長江に行くこと四日、茶房(チャーファン)①がもうすぐ宜昌(イーチャン) に到着だと言った。旅客はだれもがほっとした気持ちになった。特にそこに着いたら船を替えて西に向かうという話を聞き、みんなはさらに楽しい気分になった。夕暮れ時になると文姉さんとお茶を入れ、鉄の腰掛けに座って茶の香りを楽しみながら昔話しをした。

①茶房(チャーファン)……昔の言い方で、ホテル、料理店、汽車、汽船などで働くボーイ、給仕人、雑用係を指す。

突然、青い木綿の服を身につけた女性の死体が睡眠を漂ってきた——腹が膨張し顔はすでに腐乱している。凄惨な光景だった。すぐに疑問が生じた。どうしたのだ？ 自殺なのか？ だれかに殺されたのか？ それとも乗っていた船が事故に遭ったのか？ 彼女の家の者はまだ知らないかもしれない。彼女には夫と子供がいるかもしれない！ 彼女は避難民で、夫と子供が敵の弾丸で亡くなったのかもしれない、それで生きる意志を失い、身を投げる決心をしたのかもしれない……。

こんなことを想像しているうちに、自分も飛び込んで死んだほうがいいのではないかという思いに襲われた。早くに母の愛を失った一人の子が、ただ一人の父を戦闘区域にある故郷に残したまま、だんだん遠くに離れていく。ひょっとしたらこれが最後の別れになるかもしれない。そう思いながら、それでも「この悲劇を作り出している悪魔に報復しなければならない」と、ただそれだけを心に命じていた。

私が思考のわなに陥って苦しんでいた時、旅客が慌ただしくあちこち動いて大騒ぎになった。船が左に傾いて沈没する危険にさらされたのだ。テーブルの上の食器が跳ねながら床に落ちた。船長は慌てふためいたが何をすることもできず、臆病な女や子供たちは泣き叫んでいた。水に落ちて魚やカニの餌になるのは誰だって怖いものだ。やっどここまで命からがら脱出してきたのに、今になって水の中で死んだら無念そのものだ！

幸いにもすぐに危険は去り、みんなはやっと安心した。後で聞いたところでは、操舵士が曲がる時にやり方を間違えたのだということだった。私と文姉さんは騒動のときは恐怖を感じなかったものの、理由が分かると身震いし、冷や汗が出て、思わず心の中で神のご加護に感謝した。

隣室の楊先生はほかの人を見て冷ややかに言った。「はじめて泳ぐ機会がきたんじゃないか！ よく体が洗えたのにな！」これを聞いて笑っていいのかどうか、ほんとうに悩んだ。

死別こそしなかったものの、もうすぐ生きて別れることになるかもしれないと思うと、船上で親しくなった旅の道連れたちは、急いで連絡できる住所を交換し合った。私も楊先生と熊先生と名刺を交換した。深夜二時ごろ眠りから覚めると、船はすでに岸からそれほど遠くないところに停泊していた——宜昌に着いたのだ。

船の端に立つと、岸の上の灯りがきらめき、水面に映った淡い光が揺れ動いているのが見えた。この光景を見て、杭州の西子湖や南京の玄武湖もいかばかりと想いを馳せる人もいるだろう。だが、いまが「西子湖の蓮根は収穫の盛り、玄武の蓮は開花する②」時節であろうはずがない。いつになったら“彼女たち”の胸に抱かれる日がくるのだろうか？ それはだれにもわからない！

②原文は「西子藕盛和玄武荷開」。杭州にある西子湖（西湖）も南京市内北東部にある玄武湖も蓮の花が咲くことで有名。西湖では蓮の地下茎のレンコンが収穫され、特産品としていろいろな食品に加工されて販売されている。



堂屋

飯任まい

翌日、早起きして小舟を雇って岸に上がった。まず航政局①に行き船の運航情報を聞いた。彼らの話では二週間後に西に向かう避難民用の船があるということだった。民間の船は切符を買うのが容易でなく、名前を登録しなければならないし、これから順番待ちをしなければならない。一か月待ってもまだ出発できていない人がいるそうだ。

①航政局……長江の水上交通の安全を図るために設置された四つの政府機関の一つ。ほかには大連海上安全監督局、上海海上安全監督局、広州海上安全監督局がある。

私もここで待たなければならないようだ。そこで風呂屋に行き散髪をし、ちょうど気持ちよく朝食を食べ終わったとき、空襲警報が響きはじめて爆弾が一発落ちた。ここで爆死したら無念だ、と心の中で思った。

しかし大きい爆撃はなく、しばらくしたら警報は解除された。そこでまた冀野(ジューイェ)②が漢口にいたときに書いてくれた紹介状を持って県長に会いに行った。船の切符が少し早く手に入るようにしてくれるかもしれない。役所の中で少し待っているとすぐ李県長に会えた。故郷の訛りまるだしでとても誠実な態度だった。即座に二週間以内に切符を買うように手配するのとたえ、衛兵に、私がしばらく滞在できる空き部屋のあるところに連れていくように命じた。私は満足して別れの挨拶をした。

②冀野(盧冀野)(1905-1951)……「江南才子」とも呼ばれる多才な人物で小説、古典詩、新体詩の作品集のほかにも多くの理論書を書き、河南大学、成都大学、復旦大学などで教鞭を取った。

衛兵の後ろからついて何度道を曲がったかわからないが、最後に狭くて汚い路地に入ってしまった。騒々しくて臭いのする紙屋の裏庭に、狭くて薄暗い小さな部屋があった。あまり快適なところではなかったが、しかし大家はもったいぶって貸すのをしぶっていて、もし完全武装している衛兵がにらみつけていなかったら、回れ右して戻っていったかもしれない。だから心の中でとてもこの衛兵に感謝した。

家賃はそれほど高くはなかった。法幣③八円で、二元の酒代を、荷物を運んでくれた兵士に渡さなければならない。彼らに無料(ただ)働きをさせるわけにはいかない。

③法幣……1935年に中国国民政府が行った幣制改革で、銀貨に代えて通貨として発行された法定紙幣。

大家の女主人は片手に水ギセルを持ち、片手に茶碗を持っていた。見るからに大物気取りだった。話をし出すと耳障りなことばかり言った。まるで部屋の中には宝の箱があって、私が盗みを働くのを怖れているとでも言わんばかりに、鍵をかけながらぶつぶつ何事かを言い続けていた。テーブル、椅子、寝台、そして床板まで私がだめにするかもしれないと心配していた。実に滑稽でもあり腹立たしくもあった。

いずれにしても住居の問題は何とか解決した。仮住まいの生活が始まった。食事には大通りを二つ越えた遠くまで行かなければならなかった。人力車の値段は食事代より高かった。お茶を買う、床掃除をする、テーブルを拭くといった仕事を私と文姉さんは分担することにした。彼女が床を掃きテーブルを拭く、私は外に出てお湯を買い、顔を洗うお湯を用意する。大家の小間使いは主人と同じように気取って鼻持ちならない態度をとる女だったので、彼女には頼めなかった。

この住宅は中庭が二つある造りになっているかなり古い建物で、故郷の我が家の雰囲気似ていた。棟をつなぐ屋根付きの廊下があり、堂屋(タンウー)④の正面の梁の上には、この家の主の七十歳の誕生日に贈られた「二品学政史⑤」という肩書が書かれた祝いの額が飾られていた。中庭には「欽封巡撫⑥」の肩書がかかれた額がある。見たところこの家の主の身分はけっこう高かったようだ。

④堂屋……伝統的な中国式住居の儀礼用に作られた部屋で一般に屋敷の中央にある。

「客間」という意味でも使われるが、現在の応接間と同一ではない。堂屋には祖霊神や厄除け神などが祀られている。

⑤二品学政史……学政史は学校や科挙の試験の管理をする役人で、二品は階級を表す。

⑥欽封巡撫……巡撫は清の地方長官。欽封巡撫は皇帝から封じられた地方長官の職の意。

堂屋はとても大きくて、二つの四角いテーブルに四つの旧式の半円形のひじかけ椅子が置いてあった。中央に小さな神棚があり「玉皇大帝」などと書いた牌が供えられていた。両側の棟には居室があり、私は東側の棟に泊まった。部屋の古風なしつらえは故郷の家とたいして変わらなかった。特に天蓋付きの寝台は母が生前使っていたものと同じだった。高いところに開けられない小さな窓があり、下には机が置かれている。毎日日光を見られなくて新鮮な空気を吸えないことを除いて、当地のことばでいえば「要得(ヤオディ)」(「良い、OK」の意)だった。

とても静かな環境だった。日中は部屋の中でものを書いたり本を読んだりすることができた。日陰になっていたのもとても涼しく、扉を閉めて上着を脱いでいると一日中汗をかくことはなかった。二編の戯曲、『花嫁』と『逆巻く黄河の波』はこのような状況のもとで書かれた。

夜は部屋の明かりは暗すぎるので女主人のようす見て、堂屋で食事をしたあと、さらに電灯の光の届いているテーブルを見つけて、電気がついている間はそこで夜遅くまで書いて、それから就寝した。『花嫁』と『逆巻く黄河の波』は今回の旅の収穫だと言える。



宜昌の街の風景

傷 痍 軍 人

一日一日と宜昌のことがよくわかるようになってきた。仮住まいをしている場所のかなり近くにある“学院街”に北方料理を出す一軒の小さなレストランがあった。ここで食事をすれば脚力を無駄に使わなくて済むが、毎日四往復しなければならない。しかし飢えた腹のためにはこれ以外に方法はなかった！

宜昌に着いて以来、民族解放のために戦って腕をなくしたり足をなくしたり失明した傷痍軍人たちが二、三人で連れだって歩いている姿をたびたび目にした。彼らは互いに支え合いゆっくりと、ためらいながら歩いていた。特に悲惨だったのは下肢をすべて切断した者が両手を使って道路の端を這って進んでいる姿だった。それは本当に見るのが辛かった。“学院街” 一帯は特に負傷兵が多かった。彼らはすべて赤い十字の印のついた軍服を着ていた。片腕をなくした者はまだ幸せなほうだった。彼は日常生活の軽い動作をすることができたからだ。両腕を失った者の苦労はどれほどのものだっただろう。片足の男は一本の棒を支えにして歩いている。両足が不自由になった者は二本の棒を脇に挟んで歩かなければならない。慣れればそれも便利なものと言える。しかし両腕を動かしてほかの動きをすることはできない。

失明した者となるといつも片腕の者や片足の者と一緒に歩いているか、たまには一本の竹竿を支えに一人で街をぶらぶらと歩いていた。彼らはみな親しみやすく親切だった。そうなのだ、彼らだけが相手の心の深いところにある苦痛を知り同情することができるのだ。彼らこそが互いに助け合い慰めることができるのだ。彼らは国家と人民を守るために負傷した。だからいつも負傷兵を見るたびに後ろめたい気持ちになり心が痛んだ。

その日、文姉さんといっしょに“永興飯館” に行くと、右腕を失った男が左足を切断した男を支え、よろめきながら入ってきた。二人とも将校のようだった。片腕の男は立派な軍服を身につけていた。片足の男は若く整った顔をしていた。だがその顔は憂いで覆われていた。

「酒！ 二斤！」片足の男が言った。片腕の男はやっとのことで懐から手紙を取り出し、ちょっと見てから片足の男に手渡した。このとき給仕が酒を運んできた。「見てくれ、女房からの手紙だ！」片腕の男が言った。

片足の男は手紙を受け取ったが、それを見ないで酒を飲みつづけていた。

「女房がもうすぐやって来るんだ。もう仕事はしないでずっと俺の面倒を見る、俺を助ける、無くした右手の代わりにする、と言ってるんだ。」片腕の男の口調には得意げな調子があった。

片足の男は何も言わず、ただ苦い笑いを返した。片腕の男は話を続けることができなくなり、同情するような目で相手を見た。何か言おうとしたがぐっと飲み込み、その手紙を引き取った。

「酒だ！ 酒！ 一斤！」片足の男が呼びつづけていた。だが今回は、給仕人はすぐには持ってこなかった。彼が少し酔っているのがわかったし、片腕の男が給仕人に目で制止の合図を送っていたからだ。

この時、赤ん坊を抱いた女が近づいてきた。ぼろぼろになった服を着て髪はぼさぼさで、一見して彼女が避難民だとわかった。給仕人は彼女の前に立ちはだかった。そして厳しい声で言った。「あんた、何をしてるんだい？」

女が答える前に、片足の男が突然立ち上がった。左わきの下にあった松葉づえが斜めになって倒れるところだった。彼は真っ赤な目で給仕人をにらみつけ獅子のように怒鳴った。「お前は何をしてるんだ。中国が戦争しているのを知らないのか？ この人の旦那は兵隊に行ったか、そうじゃなかったらもう戦死してるかもしれない。この人は鬼子(グィズ)のせいで後方に逃げてきた！ それで避難民になったんだ。避難民は物乞いをするしかない。だからしてるんだ。わかったか？ お前は、お前はいまこの人の前で威張りくさって我慢ならない態度をとっているが、いつかはお前にも災難が降りかかってくるぞ！ そうしたら同じように物乞いして歩かなきゃなくなるんだ！」給仕人は黙って聞いていたが、その顔には不機嫌そうな表情が現れていた。しかし口答えする度胸はなく、ただ「わかりましたよ」と言ってその場を立ち去った。

①鬼子……外国人に対する蔑称。ここでは日本人を指している。

片足の男は震えながらよろよろと女の前に行った。女はテーブルの端に顔を伏せて泣いていた。「泣きなさんな！ 何か食べなさい。住むところはあるのかい？」彼は懐から法幣を一枚取り出して女に与えた。

「ありがとうございます、先生！ さっきおっしゃったとおりです。夫は召集されて兵隊に行きました。それから何の便りもないんです。私は子供を連れてやっと安慶^②から逃げ出してきました。今は河岸の小屋に住んでいます。子供は病気です。本当に、できることなら川に飛び込みたいくらいです！」こう言うと女はまた声を上げて泣きだした。

「どうして避難民収容所に行かないんですか？」と、私は思わず近寄って聞いて聞いた。

「満員なんです。どんなに頭を下げて頼んでも入れてくれませんでした。」彼女はすすり泣きながら言った。

いったいどうしたらいい？ 私自身が避難民の一人ではないか。彼女に少しのお金を渡す以外、私には何もできなかった。「辛抱して。ご主人が勝利して帰るのを待つ

てください。息子さんが大きくなるまで待つて。二人があなたの希望で、二人のためにあなたは生きていくべきです。くれぐれも自殺なんてことを考えないで、気を強く持つてください！」私は彼女を励ました。

②安慶……安徽省南西部、長江北岸にある港湾都市で、古来から軍事上の要地として重視されてきた。

「そうだ、気を強く持つんだ。」片足の男が力を入れて繰り返した。そして興奮したような目で私を見た。その女は感激して何も言えずに、丁寧なお礼のことばを言って出ていった。片足の男はもとの場所に座り、また前と同じように黙りこんだ。そして「老呉(ラオウー)③！」と、力まかせに片腕の男を叩いた。片腕の男、老呉(ラオウー)は「痛い！」と叫んだ。片足の男は急いで「忘れてた、すまん、すまん！ まだ良くなってないのか？」と彼を慰めた。

③老呉(ラオウー)の老(ラオ)は敬称として用いられているもので「老人」という意味はない。年上の人の姓の前に付けて用いられる。「老呉」は「呉さん」ほどの意。

片腕の男が首を横に振って言った。「いったい何の用だい？」

「老呉！ なあ、教育を受けた女はみんな良心があるだろうか？」

「そりゃ……」と、老呉がためらいながら言った。「そうとは限らないよ。」

「それじゃ文玲(ウエンリン)は俺を忘れたんじゃないだろうか！」片足の男はがっかりしたように言った。

「老楊(ラオヤン)！」と老呉が片足の男の肩を軽くたたいて言った。「文玲を信じなきゃいけないよ。文玲は普通の女じゃない。義侠心があってあんたのことが好きなんだ。一途に思ってあんたを待っている。あんた、長沙まで会いに行けるんじゃないか。それからまたいっしょに四川に行くんだよ。」

老楊はその話を聞いて明るくなった。だが突然気が狂ったように、老呉の左手をきつくつかむと言った。「だめだ、だめだ。そんなことはできない！ 長いこと考えた。俺のことを本当に好きだってことは知っている。だからこそ失望させたくないんだ。今のようなこんなみじめな姿を見せたくない。俺は大好きだ。だからこそ苦しめたくないんだ。障害者のために一生の幸福を犠牲にさせたくない！

俺は死ぬまでひとり身でいてかまわない。ずっと想いつづけていく。絶対に文玲の邪魔をしたくない。ここ数日、手紙を書く勇気が出ない。俺が戦死したと思っているかもしれない！ 実際、どうしてわかる、俺が役立たずになってまだこうしてこの世

で生きのびているってことが。ああ！ どうして自分を撃って決着をつけないんだ？
すごく矛盾している。文玲のことを想っているのに会うのが怖い。

老呉、助けてくれ。おれを四川のいちばん高い山にある古いお寺に連れていってくれ。だれも住んでいないようなところだ。俺は静かにそこで一生隠遁生活をするよ！」

そう言うと、彼はポケットから一枚の写真を取り出した。彼は感情を抑えてずっと写真を見ていたが、写真の上に口づけをした。

「文玲、お前は満足かい？ 国家のために俺は足を一本犠牲にした。『あなたはきっと前線を駆け回っているだろう、民族のために奮闘しているだろう、あなたは勇敢で、私のために報復している。無数の戦死者と同胞のためにかたき討ちをしている！』と
思ってくれているかい？」

興奮、悲憤、負傷した傷の痛み、心の痛み、それらが部屋じゅうに満ちてみんなは窒息しそうな気分になった。

「老楊」と、老呉が突然沈み込んだ部屋の空気を破った。「そんなにめそめそするな。あんたはまだ中隊長の徽章を肩に付けてるじゃないか。そうだ！ また前線に行
って鬼子と戦おう。俺がこの右手であんたが歩くのを助ける。あんたは両腕で鉄砲が
撃てる。ばかな奴こそ四川へ行くんだよ！ 俺は手紙を書いて女房を来させないようにする。我々はあさって漢口に戻る。司令部に九江④への転属願いを出そう。賛成かい？」片腕の男は話し終わると興奮して自分の胸を軽くたたいた。

「本当かい？ 老呉、あんたは勇気がある！ あんたが俺の足の代わりになり、俺があんたの手の代わりになる。わかった！ 鬼子に血の清算をしてやろうじゃないか。この犠牲をむだにしちゃいけないんだ！」

老楊は気持ちがさっぱりしたように笑った。そして二人は抱き合った。私は感動して彼らのところにいき、強く握手した。「中華民族の英雄よ！ 成功を祈ります！ 悩みを忘れ、国を愛する情熱をもってお国のために戦いましょう！」

「そうだ、友人！ 我々は決してあんたの誠意には背かない。断固として敵と戦い、最後の勝利を勝ち取る！」

片足の男はそう言うと、片腕の男が彼を支えて出ていった。私は長いこと彼らに向
かって右手を上げた最敬礼をしつづけた。

④九江……江西省北部の都市。湖北省、安徽省、江西省が交わっているところにあり、長江沿岸の重要な港湾都市としての機能を果たしている。